

竹内啓二先生の「知的生活」

川久保剛

竹内先生がご退任になると言う。時間の流れに容赦はない。しかし、竹内先生のご存在は、どこか永遠を感じさせる。その所以は、先生の「知的生活」にあると思う。

現代の大学人は、研究業績という名の「知的達成」に目を奪われているといえよう。もちろん、「知的達成」は大学人にとって極めて重要なものなのだが、他方で、「知的生活」は大学人の永遠の主題でもあり、「知的生活」の伝統に参与する喜びは、「知的達成」がもたらす喜びとはまた別種のものとして、自己内容の充実を与えてくれよう。

竹内先生は、そのような「知的生活」がもたらす喜びをそっと体現して、われわれ後輩に、その伝統参与の道を示唆してくれる存在である。

言うまでもなく竹内先生は、確かな「知的達成」の歩みをお持ちである。まず、先生のご専門のインド学である。先生は筑波大学で我妻和男教授の薫陶を受けられ、国立ヴィシュヴァ・バラティ大学で博士号を取得された。その後、仏教学・比較思想の大家・中村元博士が創立された財団法人東方研究会・東方学院に専任研究員としてお勤めになり、その後モラロジー研究所・麗澤大学と籍を移されながら、多くの業績を残された。著書には『近代インド思想の源流——ラムモホン・ライの宗教・社会改革』（新評論、1991年）があり、「デベンドロナト・タゴールの思想——ブランモ教の教理を中心に」（『印度学仏教学研究』、1987年）、「ラムモホン・ライの理性中心主義思想」（『インド研究』、1988年）、「近代アジアにおける西欧近代文明の衝撃と知識人の対応——インドと日本の比較」（『比較文明文化研究』、1996年）、「Indian and Buddhist Studies in Japan」*Mahasvini : Vidypeeth Research Journal, Tirupati, India, 1999*, 「ブランモ協会と近代インド精神の形成」（我妻和男編著『光の国・インド再発見』麗澤大学出版会、2005年）をはじめとする沢山の論文を生み出しておられる。ロケーシュ・チャンドラ『インド』（リプロポート、1988年）、マハトマ・ガンジー『私にとっての宗教』（新評論、1991年）などの共訳もある。

また先生は、モラロジー研究所の研究員として、基礎理論研究室、比較文化研究室、比較思想研究室、人間学研究室などを渡り歩かれ、廣池千九郎やモラロジー、倫理道徳にかんする多くの研究成果を残された。人間学研究室の室長

として、聖人に関する共同研究を推進され、その成果を竹内啓二編『いのちと愛の思想——廣池千九郎の聖人研究の継承と発展』（モラロジー研究所、2010年）にまとめて刊行されたことは逸することのできない業績であろう。

さらに先生は、死生学にも研究の領域を広げられ、小田川方子・欠端實編著『「癒し」の思想——伝統から未来へ』（麗澤大学出版会、2002年）、水野治太郎・日野原重明・アルフォンス・デーケン編著『おとなのいのちの教育』（河出書房新社、2006年）などの書物に執筆や翻訳を通して関わられ、「ケアの倫理に関する研究論文のリスト」（『麗澤学際ジャーナル』、2004年）、*“A Reconsideration of Death Education in Japan in the Light of Various Criticisms”*（共著、『麗澤学際ジャーナル』、2008年）、「インドとアメリカの死生学」（『麗澤学際ジャーナル』、2010年）など多くの論考を執筆された。

竹内先生の「知的達成」の一部を挙げさせて頂いたわけだが、これからも先生は御研究を継続され、われわれ後輩に新たな学恩を与えてくれるに違いない。

しかし、それ以上の学恩こそが、先生の実践してこられた「知的生活」に求められよう。

先生において、「知的達成」はそれ自体として完結せず、その「知的生活」と結びついて、良き統合を実現している。

実際に先生は、インドのお茶を楽しまれ、民族衣装を愛好され、お香の楽しみ方を教えて下さる。

インド学の学識を誇ることもなく、あらゆる学会、研究会、イベントにお顔を出され、まるで大学院生のようにノートをとられ、学ぶことそのものを楽しんでおられる。

驚いたことに、ご自分の教室にいるある大学生に新しいノートテイキングの方法を教えてもらった、と、うれしそうに私に語られたこともあった。

つまらない「自我」など先生には無く、自由に、純粹に、知を楽しむ生活をしておられるのだ。

だから、そこには何か永遠なものの顕現がある。

そもそも、何のための知的活動であろうか。「知的達成」のみが全てであろうか。むしろ、「知的達成」をいかに「知的生活」と統合し、〈知の全体性〉を実現するのかというテーマこそが終極的なものなのではないだろうか。

キャンパスにおける先生のお姿を拝見すると、そのようなことを自然に考えてしまうのである。

竹内先生には、社会活動家の顔もある。つまり、NPO法人千葉県東葛地区生と死を考える会の副理事長兼事務局長として、水野治太郎理事長を一貫して支え、会の安定的運営と発展に貢献しておられる。

現在、同法人は千葉市、越谷市にも支部を広げ、200名を超える会員によって、患者と家族、死別体験者、自死遺族などの支援活動が精力的に行われている。

しかし竹内先生は、そうした自己の社会的活動を、やはり誇ろうとはしない。そして、大きな大会ともなると、通訳などのお仕事を通して、大会の運営を、大学人ならではの教養を踏まえて担われたのである。

「知的達成」と「知的生活」を統合するのは難しい。どうすれば良いのか。現代の大学人は、山積する表層的・時局的な諸問題が解決した後に、この古くて新しい永遠の本質問題に直面し、取り組んでいくことになるだろう。

竹内先生のお姿は、その時、あらためて想起され、ひとつのヒントとして、われわれ後輩を方向付けて下さるであろう。